
第 11 章 義認

11.1. 神は、有効に召命した人々を、また値なしに義と認めるのですが（ロマ 8:30, 3:24）彼らに義を注入することではなく、彼らの罪を赦してくださることで、彼らを義なる者として認め、受け入れてくださることで、彼らの中で、また彼らが行った何事のゆえになれたのでもなく、ただキリストのゆえだけに、信仰そのものが転嫁されてでもなく、信じる行為や、他の福音的従順を彼らの義と見なしてなったのではありません。信仰によってキリストを受け入れ、キリストとキリストの義を依存する者たちに、キリストの従順と贖罪を彼らに転嫁させることで（ロマ 4:5-8、IIコリント 5:19, 21、ロマ 3:22, 24, 25, 27, 28、テトス 3:5, 7、エペソ 1:7、エレミヤ 23:6、Iコリント 1:30, 31、ロマ 5:17-19）なるのです。彼らの持っている信仰は、彼ら自身から出たのではなく、これは、神の賜物です（使徒 10:44、ガラテヤ 2:16、ピリピ 3:9、使徒 13:38, 39、エペソ 2:7, 8）。

ウェストミンスター信仰告白書は 10 章において、聖霊の有効召命を扱った以降、11 章では義認、12 章では子とすること、13 章では聖化を扱います。これは 3 章 6 項で、すでに言及されました。一方、ウェストミンスター小教理問答書では、質問 32 は有効召命、質問 33 では義認、質問 34 では子とすること、質問 35

では聖化、質問 36 では義認、子とすること、聖化に伴い有益とを扱い、ウェストミンスター大教理問答書では、質問 67 は有効召命、質問 70 では義認、質問 74 では子とすること、質問 75 では聖化を扱います。それはウェストミンスター標準文書に表れている神学として、キリストとの結合教理を説明しているのです。

1 項は、有効召命の効果は信仰であり、信仰によって義と認められると説明しました。義認の二つの要素として、罪を赦してくださることと、義なる者と見なし、受け入れてくださることを語りました。義認においてその信仰は道具的信仰として、キリストとキリストの義を依存することであり、それは神の賜物だと説明しました。ここで義認の前提は、自分は不義な者だと徹底して認め、自分のどのような行為によっても自分を義とさせられないことを悟って、不義が覆われる方法を探る中で聖霊さまが信仰を発祥させ、罪の赦しと義とされることが、キリストの中にあることを悟るのです。従って義とされる信仰は、罪人がなぜキリストを信じなければならないのか、キリストの中に救いの恩徳があることを知り、自分に適用させるためにキリストを頼るのです。勿論、キリストは、従順と贖罪の働きを通して義を確保なさったので、義と認められることは、ただキリストのゆえです。

有効な召命によって信仰が発祥され、キリストとその義を必要として、キリストを受け入れるようになります。この信仰によってキリストに結合され、キリストの中にいる罪の赦しと義と認められる恩恵を得るようになります。この信仰は人々自身から出るのではなく、神の賜物です。さらに義と認められるのは、神が審判者として行われる行為です。神は罪人を必ず審判なさる方ですが、キリストの義を信者に適用させ、法廷で、義人だと宣言してくださるのです。これは神の法的行為です。義と認められたというのは、罪に定められないので

す。罪の定めからの恐れから解放され、義人とされた者と見なし受け入れてくださる神に、当然、感謝と献身が起こるしかないのです。

1項において、義認に対する誤り等を確認することができます。ローマカトリック、ソツィーニ主義者、ペラギウス主義者たちは、彼らのうちにある義と正しい行いを通して義となれると主張するが、信仰告白書では誤りだと明確にしています。ローマカトリック教会は義の注入教理を教えますが、神が義を注入させたから実際的に義人になれたと主張します。また、すでに言及されたソツィーニ主義者は、義認を、罪の赦しの意味だけに極限させます。

清教徒当時に一番呆れるほどの誤りであったアルミニウス主義者たちは、信じる行為を、義とされる根拠だと主張し、キリストのゆえに律法の要求が緩和され、全き従順の代わりに、福音的従順が義と認められる根拠になると述べました。結局、アルミニウス主義者たちは、行いが不完全であっても、行為があれば義人と認められるとしました。17世紀後半から流行り始めた新律法主義者 (neonomianists) は、キリストを通して私たちに新しい律法が与えられたが、この律法に従順することができ、信仰と悔い改めを可能にさせて、義人と認められると主張しました。⁹⁶

18世紀のジョン・ウェスリー (John Wesley, 1703-1792) は、義認の要素として罪の赦しだけを認め、義の転嫁は反対しました。結局、義とされるためには行為があるべきだと述べました。20世紀には、カール・バルト (Karl Barth, 1886-1968) は、義認教理がドイツ神学の残材物だ言いながら和解教理と対処させました。

96 リチャード・バクスター (Richard Baxter, 1615-1691) は後期に新律法主義 (Neonomianism) に従いました。

20 世紀から起こった現代福音主義は、アルミニウス主義に従いながら、聖霊の有効な御業なしに意志を捧げる決断によって義となれると主張します。20 世紀後半から起こった最近の有力な神学として定着しているパウロの新しい観点では、教会に入って来て救われた以降は、律法を守って最終的に義となれると主張しますが、神学的構造の面でウェスリーの義認概念とそっくりで、16 世紀、英国国教会のリチャード・フッカー (Richard Hooker, 1554-1600) の主張と同じです。

11.2. キリストを受け入れ、キリストとその義に寄り頼む信仰は、唯一の義認の道具です (ヨハネ 1:12、ロマ 3:28, 5:1)。 しかし信仰は、義と認められた人の中で、一つの恵みとしているだけではなく、常にあらゆる他の救いの恩恵を同伴させます。義と認められる信仰は、死んだ信仰ではなく、愛によって働きます (ヤコブ 2:17, 22, 26、ガラテヤ 5:6)。

2 項では、道具的信仰、信仰によるキリストとの結合、そして信仰の効果、以下、証拠を説明しています。道具的信仰は、3 つの機能をします。キリストを受け入れることと、キリストを寄り頼むことと、そして、キリストの義を頼ることです。キリストの義を頼ることとは、キリストを受け入れる時、自分は不義だと徹底して悟り、自分のどのような行為によっても義となれないことと、キリストの義が必要だと切実に認知した状態で、キリストを受け入れるのです。この時、信仰を持っている者は、キリストの貴重性と高貴な価値を知っているため、キリストだけを頼りつかむのです。

2 項では、信仰によって義とされることで終わるのではなく、信仰によって救いの他、あらゆる恩徳が伴われることを強調しました。義認が起こった者たちには、救いの色々な恩恵が与えられますが、子となること、聖化、堅忍と確信

などです。これは、信仰によってキリストに結合されて、義認と伴い与えられる救いの恩恵です。ウェストミンスター信仰告白書は、有効召命の次の項目として、義認、子とすること、聖化を扱うのは、キリストとの結合教理を扱っているのです。従って、義認と聖化は同時的なことであって、義認が生じられたなら、必ず、聖化が表れなければならないことを意味します。

このような方式の説明は、ウェストミンスター大教理問答書と小教理問答書においても同じです。大教理問答書では、69番から75番までであり、小教理問答書では、質問32番から36番までの内容が2項で説明しているのと同じです。特に、大教理問答書では、キリストとの結合に対する用語を具体的に使用しています。従って救いの順序だけを強調して、結合教理を無視するウィリアムソン (G. I. Williamson) の解釈は問題があって、結合教理だけを強調しながら救いの順序教理を反対するアンソニー・ホークマ (Anthony Hoekema, 1913-1988) も間違った解釈です。ウェストミンスター信仰告白書は、有効召命においては救いの順序を扱っていて、その次の部分は結合教理を扱っているのです。

2項の最後の部分は、キリストとの結合教理を扱った後の、結果に対する説明だったりもします。信仰によってキリストと結合されれば、義認が起こるだけでなく聖化も起こされます。その証拠は、行いとして出て来ます。それで義と認められる信仰は、愛によって働く信仰だと言うのです (ガラテヤ5:6)。勿論、この項において、誤りとして示される道德律廃棄論主義者は、信仰によって義とされたので救われたと言い、聖化が救いのために、必ず、必要なものでないと主張しました。18世紀のハイパーカルヴァン主義者たちも義認によって救われたので、聖化が救いに含まれるということに反対しました。これは、改革神学から逸脱した極端の誤りです。

11.3. キリストは、ご自分の従順と死によって、義とされるすべての者たちの負債を十分に支払い、全く支払ってくださり、彼らの代わりに、御父・神の公儀を適切に、実際に、完全に満足させました（ロマ 5:8-10, 19、I テモテ 2:5, 6、ヘブル 10:10, 14、ダニエル 9:24, 26、イザヤ 53:4-6, 10-12）。しかも彼らのために、父によってキリストが無償で与えられ（ロマ 8:32）、彼らの代わりに、その従順と公義を満足させたことが受け入れられたので（II コリント 5:21、マタイ 3:7、エペソ 5:2）、それは、彼らの中にある何事のゆえでもないから、彼らの義認は、ただ、値なしに与える恵みに属するものです（ロマ 3:24、エペソ 1:7）。罪人たちを義なる者と認める神の目的は、神の確かな公義と、豊かな恵みがあがめられるためです（ロマ 3:26、エペソ 2:7）。

3 項において、義と認められる根拠は、キリストの贖いの働きにあることを説明しました。キリストが十字架で死なれたことで、選ばれた民たちの罪の対価が支払われ、御父に全き従順を奉げることによって、キリストは、ご自身の民を義とすることができる義を確保されました。一方で、父は、キリストを復活させることによって、キリストの義を証しました。それでキリストを信じる者たちに義を転嫁させるのです。このように罪人を義人とさせる方式は、神の義と同時に、神の豊かな義を現しています。従って、義とされた者たちは、みなが負債を負っている者たちです。しかしソツツイーニ主義者たちは、キリストがご自分の民の代わりに、神の公義を完全に、十分に満足させたことを否定します。

11.4. 神は、永遠の昔から、選ばれた者すべての者を、義とすることを聖定されました（ガラテヤ 3:8、I ペテロ 1:2, 19, 20、ロマ 8:30）。彼らが義とされるために、再びよみがえられました（ガラテヤ 4:4、I テモテ 2:6、ロマ 4:25）。それにも関わらず、定まった時に聖霊が実際にキリストを彼らに適用される以前までは、彼らが義とされたわけではありません（コロサイ 1:21, 22、ガラテヤ 2:16、テトス 3:4-7）。

1 項において、有効召命を言及して、義認を説明したように、聖霊の有効召命によって信仰が発祥され、その信仰によって、キリストの贖罪と義を自分に適用する時、義と認められるのです。従って 4 項において、選ばれたと言っても、実際に救われるのは、聖霊さまがキリストの血を適用させる時です（ヘブル 9:14）。

4 項の言及によって、誤り等を分別することができますが、ハイパーカルヴァン主義者たちは、選び教理を乱用して、永遠前、義認を宣べます。これは明白な誤りです。4 項での言及と同様に、神の選びは、有効召命の効果が表れた時、確認することができるのです。また、アルミニウス主義者たちは、キリストが彼らの救いのために、対価を支払った瞬間、義と認められると主張しますが、これもやはり誤りです。

11.5. 神は、義とされた者たちの罪を続けて赦してくださいます（マタイ 6:12、I ヨハネ 1:7, 9, 2:1, 2）。そして、彼らが、まして義認の状態から落ちることはありませんが（ルカ 22:32、ヨハネ 10:28、ヘブル 10:14）、彼らは、自分の罪のために神の父性的な怒りの下にいることもあり、彼ら自身を低くさせ、自分の罪を告白し、赦しを求め、自分の信仰と悔い改めを更新するまでは、彼らは回復された神の御顔の光を持つことができません（詩 89:31 - 33, 51:7 - 12, 32:5、マタイ 26:75、I コリント 11:30, 32、ルカ 1:20）。

義認は一度切りで完成されるから、義と認められた者は、再び罪に定められることはありません。また義認は、神が個人に宣言なさったことです。それは、キリストの義に根拠したことで、永遠の含蓄性を持ちます。従って、義と認められた状態にいるキリスト者は、その状態から落ちて行くことはありません。

それにも関わらず、すべてのキリスト者は、自分は義と認められたが、罪を犯していることを知っています。それで主が、私たちに、毎日罪の赦しを求める祈りをしなさいと教えたのです(マタイ 6:12)。従って、真に義とされた者は、罪を思いのまま犯しても良いという考えを一切できず、弱くて罪を犯した場合は、神に進み出て悔い改めます。一方、神は、義とされた信者にある罪に対して責め、真の悔い改めのために彼らに懲らしめを行います。神さまが信者に悔い改めるように施される恵みは、彼らを低くさせ、罪を告白し、赦しを乞うようにさせます。結局、彼らは、信仰と悔い改めを新たにしますが、それを霊的更新と呼びます。回心の霊的過程も同じようなものです。

5 項の叙述において、清教徒たちは道徳律廃棄論主義者が誤りだというのを示しました。道徳律廃棄論主義者たちは、義認以降に犯した罪は、彼らの救いに何の影響も与えないと主張し、一度の救いは永遠の救いだと言いながら、義認教理を乱用しています。道徳律廃棄論主義とは反対、極端として、救い以降に義の行為があつて義となれると主張するウェスリーと、教会に介入されて後、律法の行為があれば義となれるというパウロの新しい観点は、誤りです。勿論、最近、主張している、留保的義認論も誤りです。

11. 6. 旧約の信者の義認と、新約の信者の義認とは、すべての面で一つ、同じものです(ガラテヤ 3:9, 13, 14、ロマ 4:22 - 24、ヘブル 13:8)。

この項目は、ウェストミンスター信仰告白書 7 章での、契約を説明したことと一貫性を持っています。そして 8 章での、キリストの仲介者の職務を説明したことと同様、神の救いは一つであつて、すべての時代を通して永遠まで同じです。しかし、ソツツィーニ主義者たちは、この項目の言及を、反対します。